

ヨーロッパの旅(六)

平井信義

ウィーンは、ぼくにとって憧れの町であった。この前に訪れた時は、ちょうど三月の初めでもあり、木々が芽生えるには早く、冷たい風で街路も凍てついている日が多くあった。それでも、友人山田君の案内で、ドナウ河を見おろす丘にのぼったり、夜は歌劇フレীদেরマウスやコミックを聴きにいったり、あるいはシュピール教授の主宰する実験学校を見にいたり、児童相談所を見学したりで、忙しい日々であった。その間、どこにいても親切を受けた思い出が、ぼくのころにはいつも暖かくよみがえってくるのであった。

今度の旅行でも、ウィーンでの日々には、東京を出発する前からの期待がかけられていた。ドイツを北から南東へと下って、ミュンヘンでの数日を過ごした後に、再び飛行機に乗って、一時間ほど東へ飛んだ。幸い天候に恵まれ、右手の窓からは雪を頂いたアルプス連峯が、脈々と続いているのが見えた。それらの山脈

が、やがてウィーンの青黒い森の影となって眼下に迫る頃、飛行機は高度を下げて、飛行場についた。

バスでエアターミナルにいくと、ホテルの案内所が設置されていて、若い男がすぐ応待にしてくれた。

「二人で二五〇〇円以下のホテルかパンションを求めているのですが……」

「バス付きだとないが、それでもいいのですね」

「ええ、朝食はついていますか」

「朝食付きです」

「それでお願ひします」

「では、パンション・モーツァルト。これがいいでしょう」

「なるべく町の中央に近い方がいいのですが……」

「このパンションは、オペラハウスまで七、八分のところですよ。以前にウィーンに来たことがあるのですか？」

「ええ、一週間ほどいました。そこまで、電車だどのようなに
いったらよいでしょうか？」

「電車だとむずかしい。タクシーでいった方がよいでしょう」
私どもは、タクシーに乗ることを出きるだけ避けたかった。そ

れは、第一にお金がかかること、第二には町をおぼえるにはでき
るだけとぼと歩いたり乗ったりをまめにすることだったから
である。しかし、午後を有効に使わなければならない。早速、タ
クシーを頼んだ。

「パンション・モーツァルト、この町です」と、ぼくは、住所
を書いてもらった紙片を見せた。それに大きくうなずくと、タク
シーはゆっくりゆっくり走り始めた。鼻歌でもでてきそうな運転
振りが気に入った。

「オペラハウスから近いということだが……」と話しかけてみ
る。

「そう六、七分も歩けばいきますよ。いいところだ。静かで……」

「ウィーンはいい町だね」

「どこから来たのですかね」

「日本から……」

「前にも来たことがあるのですか……」

「左様」

「できるだけ、近道をしていきますよ」

それがサーピスだと言いたげに、細い露路をまめに曲りなが
ら、二〇分ほど走って、三方に道が分れている角についた。

「この辺にあつたはずだが……。ああ、あそこだ。看板がでて
いるでしょう」

なるほど、縦になった看板に、MOZARTと記されてあつ
た。その下に自動車をとまると、運転手はわれわれの荷物をおろ
してくれた。

「Danke Schön！」

家内もそれにならって、ドイツ語で「ありがとう」を言った。
チップを少しはすむと、運転手はにっこりして、

「たくさんお楽しみ下さい！」

といて、もう一度にっこり笑い、運転台にのり込んだ。

自動車が行き去る音をうしろに、われわれは、その建物の奥に
なつたところにあるうす暗い階段をのぼっていった。古い建物
だ。白い壁はうすぎたなく、目の前に現れた二階の戸口も古めか
しい。そこに、パンション・モーツァルトと記されてあつた。呼
鈴を押す。

扉の裏に足音がして、扉が開く。一六、七才と思えるおかつぱ
の女の子の顔が現れた。私が名乗ろうとすると、

「日本の方ですか、どうぞ！」

と行って、戸を締めると、われわれに鍵の束を示した。

「これが、この戸口の鍵です。もう一つが、お部屋の鍵です。

夜の十時をすぎると、一階の入口が締りますから、この鍵であけて下さい」

と一つ一つを、もう一度たんねんに示してくれた。

「わかりました。十時までは下がいているのですね」

その女の子は、われわれの先に立って廊下を歩き、左に折れた。そのつき当りがわれわれの部屋であった。

「いい部屋だ」

「広いじゃないの」

二人の満足した顔を見て、少女は微笑した。そして、鍵の束を渡してくれた。

「ありがとう」———そういいながら、ぼくはチップを渡す。ち

よつとびっくりしたような顔をしたが、

「ありがとう」

と言い、すぐに部屋から姿を消した。

「ウィーンのが家。下宿、モーツァルト！」

といいながら、ぼくはベッドへ身を投げ出した。

「いい名前の下宿じゃないか！」

そう言うぼくのころには、ウィーン滞在に幸が多いことを望む気持があった。

「とにかく、昼飯を食べること、オペラの切符を買うことだ。ひと休みしたら、出かけることにしよう」と、ぼくは家内が疲れてはいまいかと、それを案ずる気持でいった。

「いつでも出かけるわよ」

家内は、疲れていないのだ———と語気を強めて言った。すでに、日本を出てから五〇日になろうとしている。ケルンの宿を出てから一〇日。いたわり、いたわられながらの旅である。

「じゃ、もう一〇分したら出発しよう」

ぼくは、目をつぶって、時の過ぎるのを待った。

オペラハウスの切符売場に行くと、既に前売券は全部売り切れ。それも、けんもほろろの応答で、腹立たしくもあり、がっかりもしたが、その後、内田大使の御好意で切符が手に入り、「薔薇の騎士」と「リゴレット」の二晩をじゅうぶん楽しむことができ、再び、カーレンベルクの丘から、青々とした葡萄畑の下に、太陽に輝きながら流れていくドナウ河を見おろすこともできた。あるいは、婦人教会、モーツァルトの家、シェーベルク宮殿など…………。

さて四日目、われわれはウィーンの小児科教室に、アスベルガー教授をお訪ねすることにした。アスベルガー教授には、すでにケルンの小児科学会でお会いし、大体、一七、八日の頃にお訪ねす

る旨を話してあった。しかし、おられるかどうか——それをいぶかる気持もあったが、何としてでも「小児自閉症」の子どものことについて、いろいろとご意見を伺いたかったのである。婦人教会の近くのカフェーでコーヒーを飲みながら、そばにいたボーイさんに、病院に行く道をきいた。そのボーイさんは、よくわからなかつたらしかったが、常連の客なのである。斜めの椅子に腰をおろして同じくコーヒーを飲んでいた客にたずねている。

「それは簡単だ。八七番のバスに乗っていけば、近くでとまる」ということであつた。親切を謝し、教えられた通りの道順をとつて、十一時半に病院の玄関の前に立つことができた。

受け付けで、案内を乞う。年をとつた受け付けの看護婦が、若い看護婦を呼んで案内を命ずる。その人のあとに従つて、二階の教授室に行く。出て来た秘書に来意を告げると、

「午前中は、医師会の会合にでているが、十二時になると戻るはずだから、それまで待っていてほしい」ということであつた。ドイツでは、こうした突然の訪問を非常にいやがる。前回の滞独の折には、鼻であしらわれるような経験をしたこともある。アスベルガー教授と言えば、オーストリアでは小児科の第一人者であり、ヨーロッパでも名前をよく知られた人である。おそらく忙しいから、だであるから、ちょっとお会いしたら、そのあとは、自閉症について具体的にきくことのできる医局員を紹介してもらおうと

思つて、二人は椅子に腰をおろしたまま、時間のくるのを待つていた。約一時間もした頃、教授が入つてきた。秘書が飛んでいつて、われわれのことを告げる。大きくうなずいた教授は、家内とそして私と、次々と握手をした。

「ちょっと待つていて下さい。先に用を片付けますから……」といつて、忙しそうに教授室へ秘書を従えて入つていかれた。また、ひと時がすぎた。忙しいのに、悪かつたかな——と思つているところへ、長身でやや猫背の教授の姿が現われた。

「私は、これから食事に家に帰らなくてはなりません。が、三時にここへ来ます。そして、お二人を連れて、『子どもの村』へ案内したいと思ひます。三時に、この部屋へおいで下さい」

「お忙しい中を、あなたのお仕事を妨げるようなことはないでしょうか？」

「いいえ、ちょうど、子どもの村へいく日なのです。ちょうどいいところへ、あなた方が来て下さつたのです。では、三時に」と、再び家内と握手を交し、私の手を握つて、入口から出ていつた。

病院の近くのレストランで食事をすませると、再び病院の構内に戻り、人気の少い裏庭のベンチに腰をおろした。あと、一時間ある。ぼくは、ウィーンの空を仰いだ。

木々の梢から日が射してくる。からつとは晴れていないが、日

射しは暖い。風がそよいで枝がゆれるたびに、木の葉がさらさらと舞い降りてくる。名も知らない鳥が何羽か、あちらの枝、こちらの枝と飛びかっている。その羽音に従って、黄色くなった木の葉が散ってくる。

「よかった、待っていたかいがあった」とぼく。

「でも、待ちくたびれたわね。三時から、どこへいくんですって？」

「子どもの村だって。きつと養護施設だろう」

「どこなんでしょう」

「さあ？ 疲れたのかい？」

「大丈夫！」

その一時間は、ずいぶん長いように感ぜられた。目をつぶったり開いたりして、青い空をいくたびか見た。ウィーンの空であった。

三時に教授室へいくと、間もなく教授の姿が現われた。

「さあ、いきましよう。南へ一時間ほどいったところに、『子どもの村』があるのです。私の車でいきますから……」

教授は階段をどんどん下りて、病室の陰においてある自動車のところへいき、鍵をあげて出発の準備をした。いよいよ出発。

北に位置する病院から、ウィーン市内の環状道路を抜けて教授が運転する自動車は、南へ南へと下っていく。

「毎週一回ずつ、子どもの村にいかれるのですか？」

「そうです。子どもの村の子どものための、精神医学的な管理をしているからです」

「教授ご自身で、それをなさっているのですか？」

「そうです。私の楽しみな仕事のひとつになっています。子どもの村には、家庭から離された不幸な子どもたちが生活していますので、いろいろな問題があるのです。それを解決するお手伝いをしていなのです。あちらには心理学者やケースワーカーや学校の先生方がいますが、その方々から相談を受けた子どもについて、考える役目です」

「それは、すばらしいことですな」

「私も、そう思っています」

自動車を走らせながら、アスベルガー教授はときどき町の名所について説明して下さる。町を出ると、幾つかの村を抜けた。

「アルプスがちょうど終る山麓に、子どもの村があるのです。目の前にその山が見えて来ました。あれです！」

ヨーロッパの晩秋は、暮れるのも早い。四時を過ぎる頃には、街灯がぼつんぼつんとともりかけていた。その部落をはずれたところに傾斜になった土地がひらけ、点々とモダンな家が現われはじめた。

「さあ、来ました」

エンジンの音高く、一気に坂をのぼると、一軒の平家の家の横に自動車はとまった。教授のあとに続いて、われわれもその家の中に入っていった。公共の建物としては小さなもので、むしろ一軒の家といった方がよかった。中に三、四人の男女がいた。教授との握手がひと通り終ると、われわれとの握手。そして、ただちに、ケース会議が始まった。それぞれが担当している子どもについて説明する。「そう」とか「なるほど」とか相づちを打ちながら、教授が耳を傾ける。特に問題のある子ども二人が、電話で呼ばれて部屋に入り、教授の前に立たされる。教授は、握手をしたり、肩に手をかけたりしながら、子どもにいろいろなことを質問する。一人の子どもは途中から泣き出してしまった。

「泣かなくなってきたいい。泣かなくなってきたいい。これから強くなつて、世の中のために大いに働くのだろう。いい子だ、いい子だ」そして頭をなでられている子どもは、小学校二、三年生ぐらいの子どもであった。

その子がでていくと、教授は私の方を向いて言われた。

「国際結婚から生れた子どもなのですが、両親の関係がうまくいっていないのです。母親は、あの子を好いていないのです。ですから、いろいろの問題を持っているのです」

と、肩をすくめて、悲しそうな顔をした。

「日本では、国際結婚の問題は非常に少なくなつてしまいまし

た。終戦後しばらくは多かつたのですが……」

「そうでしょうね。これは、われわれの国々に特有な問題かも知れませんが」

ケース会議の途中で、われわれは事務の人の案内で、点在している建物を次々と見ていった。養護施設とはいえ、一軒一軒になっていて、六十七人の子どもたちが、一人の寮母さんによって面倒をみてもらっている。食事もその寮母さんが作るし、子どもたちと買いのものにもいく。一定の金額が寮母さんに渡されて、それで独自の運営をするというのである。兄弟はいっしょの家に住むようにしてあるともいう。あくまでも、家庭に似た仕組みを維持しようというねらいを持っている。

行きかう子どもたちは、遊んでいる者もあれば、買物から帰ってきたらしい者もあり、ケンカをしている子どももあった。

子どもの村を出たのがすでに六時。病院に帰って来たのが七時すぎ。「治療教育病棟」の主任の医師が待っていてくれた。教授とお別れしてからさらに二時間余り、小児自閉症その他の子どもについて、いろいろと話し合うことができた。

翌日、われわれは大きな思い出をたずさえて、ウィーンを出発した。

×

×